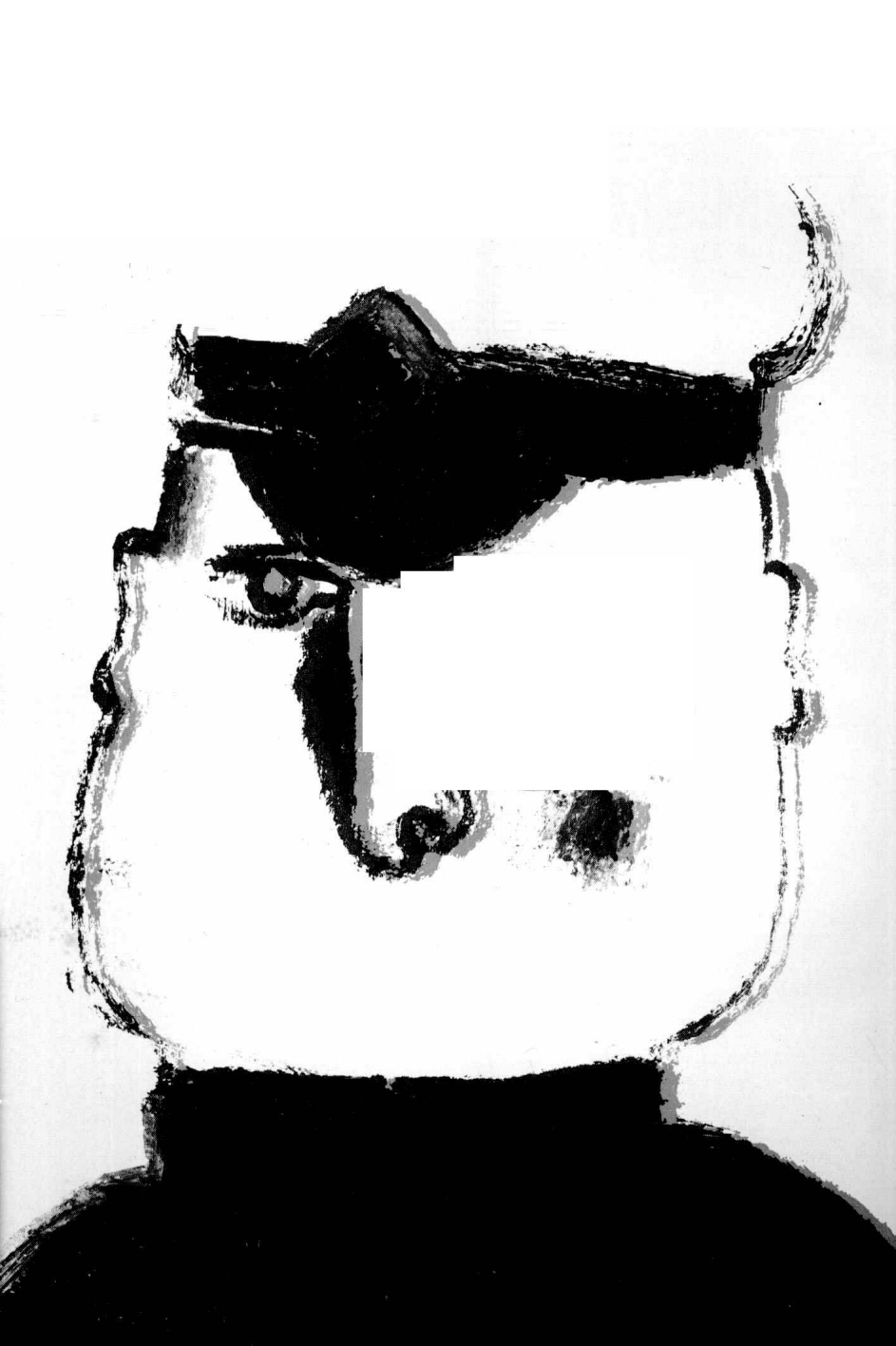
信簿がぼくを笑ってる

高田哲郎



著者略歴

高田哲郎（たかだてつお）

1935年，埼玉県秩父郡両神村に生まれる。国学院大学文学部卒業後，埼玉県小鹿野中学校・間明平中学校勤務。現在，埼玉県教職員組合専従（秩父支部書記長）。著書『へき地における国民教育の創造』(共著—民衆社刊)

通信簿がぼくを笑ってる　　検印省略

1972年9月　第1刷発行　　定価 900円
1972年11月　第2刷

著者　高田哲郎

発行者　沢田明治

発行所　株式会社 民衆社

(101)東京都千代田区神田神保町1—27
電話 (03) 294—7797　振替東京 19920

印刷・東銀座印刷出版K.K

中教審路線を克服する実践

梅根　悟

この本の著者は、今から何年か前に埼玉県のある町の教職員組合の人事対策委員会の副委員長をしていた。組合は勤務条件・生活条件の極度に悪いへき地に勤務している教師の要望に答えて、「へき地三年」つまりへき地に三年つとめた者は希望があれば平場に戻すという約束を県教育委員会にとりつけていた。だが、平場に戻りたい教師はたくさんいるのに、すすんでそのあとがまになってへき地学校につとめようという教師はいない。だから実際は戻りたくても戻れない。あるへき地校勤務の人対委員が、委員会の席上で「ここにいる平場校からでている委員のなかにも、だれもへき地入りを希望する者はいないではないか」と詰

問した。この本の著者は、この声につきうごかされて委員長と二人でへき地入りを希望し、そして埼玉と群馬の県境にあるへき地の、生徒数一〇〇人の中学校につとめることになったのである。

この本はこのへき地中学校での彼の教育実践の記録である。しかし、これはたんにへき地中学校の在り方を考えさせる本ではなく、中学教育一般、さらには学校教育一般を、どう、真に教育の名に値いする教育に改革していくべきかを、考えるうえで、多くの貴重な示唆を与えてくれる本である。

これに類するすぐれた実践記録で活字になっているものは、かならずしも少くはない。だが、そうした類書群のなかにあって、この本はやはりきわだったユニークさをもっているようである。ここにはいわゆる組合運動型教師と教研活動型教師のみごとな統一の姿がみられるし、生活指導を主軸にすえた実践をつうじて、中教審路線的な教育をど

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

う克服していくことができるか、ということについての見透しが示されている。

彼はいまみんなにすすめられて山を下り、郡の教組支部の専従書記長をつとめているが、任期が終ったらまた、山の中学校に戻るだろう。そうあってほしいと私は期待し、そのような生き方をする教師たちによってこそ、「教師による教育改革」は推進されると思っている。

一九七二年八月

国民の信託にこたえる教育

井上信甫

組合の人事交流対策に応じてすすんでへき地校入りしたことを実践の第一歩として、日本憲法・教育基本法をバックボーンに「一人で一〇歩進むより一〇人で一歩を」と唱えながら、地域と結びつく教育を、創造的にひたむきに実践していく姿は、読者に教育の可能性と進むべき道とを明るく指し示している。ここには中教審路線はない。あるのは確実に、父母とがっちりと手を結んですすめている国民教育権の具体化である。真の教育を考える父母、教師、学生のみなさんに、ぜひ一読をお奨めしたい。

一九七二年八月

目次

中教審路線を克服する実践——梅根　悟——1
国民の信託にこたえる教育——井上信甫——4
第一章　私たちの答辞——11
第一節　四編の答辞——13
1　私の答辞（その一）　13
2　私の答辞（その二）　21
3　私の答辞（その三）　25
4　私の答辞（その四）　29
第二章　通信簿がぼくを笑っている——35
第一節　教師はさけて通れない——37
1　子どものしあわせをはばむもの　37
2　通信簿がぼくを笑っている　41
3　カッコイイことばの責任　46

第二節　子どもは無気力か――50
1　オレは走っていればいいんだ　50
2　校庭だけの「解放」　54
3　うばわれた権利意識　60
4　自主性のなかみ　64
5　図書室はだれのもの　68
第三章　みんなが伸びれば私も伸びる――75
第一節　言わなきゃ損だ――77
1　教室の矛盾を掘りおこす　77
2　反論こそ友情である　80
3　ばんざい、班ができた　84
第二節　書く力、考える力、話しあう力――88
1　考える班ノート　88
2　話しあう班ノート　92
3　発表は胸がどきどきするね　95

4　私も発表会にでたい　100
5　学級親子討論会　104
第三節　一人の五歩より五人で一歩を――ひばり班の場合――　107
1　班長のとりくみ　107
2　仲間の力を引きだして　113
3　私が育てられていた　118
4　班があってこそ　123
第四節　みんなが班長のように――　125
1　みんなの怒りで　125
2　できあがったポスター　131
第五節　男女差別の解消――　135
1　手を組まないフォークダンス　135
2　男子と踊ったほうが楽しい　139
第四章　ほんとうの勉強がしたい――　145
第一節　学習の主体化をめざして――　147

1 〃ラジオ勉強室〃の集団聴取 147
2 勉強はなんのために 152
3 ふつうの勉強とほんとうの勉強 156
4 わたしはもっと知りたい 162
5 頭の包み紙をとれ 165
6 弁当と明治一〇〇年 169

第二節 教育研究サークルにて—— 178
1 サークルの意味 178
2 文学と絵画——文学作品を絵にする授業から 179

第三節 国民教育を創ろう—— 209
1 教科書反動と批判読み 209
2 自主教材(Ⅰ) 屁っぷり嫁さん 218
3 自主教材(Ⅱ) キャッチフレーズ 226
4 自主教材(Ⅲ) 新聞を読む 231
5 止める評価と伸ばす評価 234
6 日刊学級通信 242

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第五章　みんなでやればできるんだ――257
第一節　学習から実践へ――259
1　ぼくらの手で街灯がついた　259
2　通学路を舗装に　273
3　学級のわくをこえて　279
4　つまずきと発展　289
5　学校のわくをこえて　297
6　文化を招ぶ運動　304
第二節　呼びかける子どもたち――312
1　先生はどっちなの　312
2　タメかつぎが似合う先生　319
3　ストライキと子どもの学習権　324
4　自分の歩む道　327
第六章　未来を拓く学力――337

第一節　みんなの力で――339
1　子どもの目をうばうもの　339
2　ひまわり保育園誕生　342
第二節　呼びかわす若者たち――348
1　卒業生の作品（卒業後一年）　348
2　卒業生からの手紙（卒業後二年）　354
3　卒業生からの手紙（卒業後三年）　360
4　卒業生からの手紙（卒業後三年）　364
第三節　立ち上がる若者たち――368
1　卒業生からの手紙（卒業後四年）　368
あとがきにかえて――385

第1章　私たちの答辞

第一節　四編の答辞

1　私の答辞（その一）

春をまつ草木が芽をだすように、いま、私たちにはかがやかしい前途がまちかまえております。しかし、このかがやかしい前途というものは、あくまでも私たちがつくりだすものであって、けっしてひとにつくってもらうようなあまいものではありません。

私たちはいま、この中学校を卒業するにあたって、この三カ年に何を得、何を実行したか、もう一度かえりみる必要があると思います。心身ともに発達するこの成長期に、実の入った勉強をすることは、何とすばらしく尊いことでしょう。しかし、「実の入った勉強」といえば「受験勉強」と答える人があるかもしれません。これは情ないことだと思います。受験勉強がはたして私たちを幸福にしてくれるでしょうか。私は受験制度に反対します。

団結、協力という私たちにとってもっとも重要な権利をばらばらにし、利己的な人間をつくってしまう制度を、なぜ肯定できるでしょうか。勉強したい人を落として、能力ある人だけ選びぬく、これは完全に人権を犯し、平等を否定することではないでしょうか。

人にはそれぞれ個性があり、良い点、悪い点はかならずもっています。それなのに社会では、たった一度の試験の点だけで、人間の価値をきめてしまいます。この問題は一日も早く処理しなくてはなりません。私たちの手によって、ほんとうの平等な社会をつくっていこうではありませんか。

高校入試に、かならず一番ではいらなくては、という人を、私はうらんだりあわれんだり、嘲笑したりしました。しかし、思えば私のこの態度は自主性のない傍観者でした。入試に夢中になっている人も、実はこの社会にとけこんでいるだけであって、その人自身が悪いのではありません。私たちにそうさせる社会に原因があるのです。

私は、たとえみんなが受験勉強をしようと、読書をしたり、もっと身近な勉強をしようと思っていました。そして、こう考える仲間をふやそうとしました。私はそのころ、図書室にある『資本主義と社会主義』とか『労働運動の歴史』というような書物に目をそそぎはじめました。受験勉強よりずっと楽しく、また意義のある時間をすごしていられるようで、このうえなく幸福でした。

しかし、入試まで一週間、三日と日がせまってくるにしたがい、私の頭の中は「一人だけ抵抗して何になるんだ。入試をまっこうから否定したって、勉強する手段をむこうへ押しやってしまうだけではないか」という心と、「先生を信用するんだ。必ず落ちることはないん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com